

# 英語における「名詞＋名詞」型複合語の 第1要素に関する覚え書き\*

濱 松 純 司\*\*

## 1. はじめに

複合語の内、名詞＋名詞の型は英語と日本語の双方において極めて多く観察される一方、形態論において多くの問題が未解決のまま残されている。例えば、「名詞＋名詞」の連鎖がそもそも複合語であるのか、それとも句を成しているのか、また第1要素と第2要素の間にはいかなる意味関係が成立するのかなど、単純でありふれたように見える言語要素でありながら、名詞＋名詞の型の複合語は意外に多くの問題を孕んでいると言える。<sup>1</sup>

本稿では (1) - (3) のような「名詞＋名詞」の複合語における第1要素(左側要素)の品詞分類を論じ、形容詞とする説及び名詞とする説の妥当性をごく最近(2018年5月)公開された iWeb Corpus を活用し、比較・検討する。

- (1) **stone** wall, **leather** shoes
- (2) his **life** story, a **dish** cloth, a **Sussex** man, an **iron** rod, **life** imprisonment, a **Sussex** village, a **gift** tax, this **grammar** book, the **church** house, two **war** years, a further **inquiry** delay (Quirk et al 1985: 1330-1331; 太字は筆者)
- (3) a **government** inquiry, **student** performance, a **London** park, the **Clinton**

---

\*\*専修大学文学部教授

administration, the **Caroline** factor, the **biology** syllabus, a **computer** error

(Huddleston and Pullum 2002: 537; 太字は筆者)

## 2. 名詞か形容詞か—先行研究での扱い

伝統文法、とりわけ学校文法では「名詞+名詞」の複合語における第1要素を形容詞と捉えることが広く行われてきた。<sup>2</sup> 例えば、Curme (1931: 66-68) は stone bridge の stone などを形容詞として用いられていると見なしている。我が国の英和辞典の記述にもこの見方が反映されているものが多い。(1) のそれぞれの複合語の第1要素について、プログレッシブ英和中辞典第5版及びオーレックス英和辞典第2版ではそれぞれ(4)、(5)の通り、形容詞としている。

- (4) a. 形 [限定] 石の, 石造りの: a stone wall 石べい  
 b. 形 革(製)の; なめし革の [に似た]
- (5) a. 形 [限定] 石の, 石製の; 炆器製の: a stone vase 炆器のつぼ  
 b. 形 革(製)の: a leather jacket 革のジャケット

一方で、同じ伝統文法家であっても、Sweet (1891: 64) は stony road の stony を比較級に代えて stonier road と言えるのに対し、stone wall の stone は比較級にならないという事実を挙げ、形容詞の最も顕著な特徴が比較である以上、stone のような複合語の第1要素は形容詞であることを明確に示す特徴を何一つ持たないと主張している。英和辞典の中にもこの立場を取るものがある。(6) に示すように、ジーニアス英和辞典第5版はこれらの第1要素を明確に名詞として扱っている。<sup>3</sup>

- (6) a. 名 [しばしば複合語で] <岩石を構成する>石, 石材; [複合語で]

...石, ...岩<cf. limestone, sandstone>: a stone weapon 石の武器

b. 名 <動物の><なめし>革, 皮革; 革製品: a leather bag 革のかばん

ウィズダム英和辞典第4版は(7)の通り, stoneについて, 名詞としながらも形容詞的に用いられるとの注記を付ける一方, leatherの方は(4), (5)と同じく形容詞と明記している。

(7) a. 名 (材料としての)石, 石材; 形 石でできた, 石造りの: a stone wall 石壁

b. 形 革(製)の: a leather jacket 革製の上着

Huddleston and Pullum (2002: 537, 1643) は, 名詞から形容詞へ転換が起こる例は極めて稀であると述べ, 若い世代を中心に使用される fun 及び Oxbridge をその例として挙げている。いずれも very や too による修飾を許すことから, これらの語は形容詞であると認められる。

(8) a. a very fun person

b. He has a very Oxbridge accent. (a.,b. Huddleston and Pullum 2002: 1643)

これらの例を除き, Huddleston and Pullum (2002) は(1)-(3)のような名詞+名詞型の複合語の第1要素を形容詞とは見做さないとはっきり述べている。複合語の第1要素の名詞は名詞句の主要部として主語や目的語の位置に現れることが可能なだけでなく, もしそれらの名詞を形容詞とすれば, 形容詞という範疇はあまりに雑多な要素を含むことになり, 形容詞と名詞との間に膨大な重複が生じる結果を招くことがその理由である。

彼らは更に次のような根拠を挙げている。名詞は形容詞で修飾されるのに対し, 形容詞は副詞によって修飾される以上, もし第1要素が形容詞で

あれば、(9c) のように副詞が現れる形が正しいことを予測するが、それは誤りであり、実際は (9d) の通り形容詞が現れる。従って、第1要素は名詞であることが分かる。

- (9) a. a government inquiry  
 b. the federal government  
 c. \*a federally government inquiry  
 d. a federal government inquiry (a-d. Huddleston and Pullum 2002: 536)

一方、形容詞は very や too のような程度の副詞や more のような比較の要素が付くが、問題の複合語の第1要素はそれを許さない。このことに関連して、統語論の教科書の練習問題ではあるが、Carnie (2012) が次のような例を挙げている。

- (10) a. leather couch  
 b. ?the very leather couch  
 c. the very red couch  
 d. \*the more leather couch  
 e. \*The leatherer couch (a-e. Carnie 2012: 67)

(10b) は (10c) の形容詞 red に付く場合に比べ、容認度が落ちるが非文法的というほどでもなく、Carnie は明記していないが、「革らしい」のような意味を持ち、少なくとも意味的には理解できることを示していると言える。<sup>4, 5</sup> 意味的に程度を許容する以上、もし (10a) の leather が形容詞であるとすれば、比較を表す more または比較の屈折接辞 -er と共起する筈であるが、(10d, e) が示す通り、事実と反することになる。従って、第1要素 leather は形容詞とは言い難いのである。

Quirk et al (1985) も Huddleston and Pullum (2002) と同様の立場を取るが、第1要素がコピュラ文の述語としても現れる場合は、名詞から形容詞への転換が起こっていると主張している。(11) がその例である。

(11) a. a brick garage ~ The garage is brick.

b. reproduction furniture ~ This furniture is reproduction. <BrE>

(Quirk et al 1985: 1562)

これに対し、Huddleston and Pullum は次のような例を挙げ、たとえ第1要素がコピュラ文の述語にもなり得る場合であっても、修飾要素は形容詞であって副詞ではないことから、第1要素はあくまで名詞であると主張する。

(12) a. a cotton sheet / a pure cotton sheet.

b. The sheet is cotton. / The sheet is pure cotton.

(a.,b. Huddleston and Pullum 2002: 538)

しかし、Quirk et al (1985) によると、このような名詞からの転換形容詞は通常、程度を表さないが、口語、特にスタイルに言及する場合、次のように very や quite によって修飾されるという。

(13) a. His accent is very *Mayfair* (very *Harvard*).

b. It was a funny story but not quite *drawing-room*.

(a.,b. Quirk et al 1985: 1562)

もしこの判断が妥当であれば、*Mayfair*、*Harvard* 及び *drawing-room* はそれぞれ程度の副詞 very, quite によって修飾されているので、いずれも形

容詞ということになる。

Quirk らは基本的には名詞 + 名詞型の複合語における第 1 要素は名詞と考えているが、一方で名詞からの転換形容詞と酷似した面があるとも述べている。まず、(14) のように第 1 要素の名詞が対応する形容詞形を欠く場合、(15) のような形容詞形を持つ名詞と同様の意味で用いられている。

- (14) a. He's taking a physics course. ['course in physics']  
 b. She dislikes city life. ['life in a city']
- (15) a. He's taking a medical course. ['course in medicine']  
 b. She dislikes suburban life. ['life in a suburb']

(15) の *medical*, *suburban* のような名詞から派生した形容詞は、述語として用いられたとしても、限定用法に比べ容認度が落ちるという事実も、(14) の第 1 要素と (15) の形容詞との共通性を支持することになる。更に第 1 要素の名詞と転換形容詞が等位接続され得るという事実にもまた、両者の共通性が見られると主張する。

- (16) a. She likes both *cotton* and *woollen* dresses.  
 b. They detest both *suburban* and *city* life. (a.,b. Quirk et al 1985: 1562)

この主張は Quirk ら自身が主張する以下の事実と矛盾する。Quirk らは (17a) のように名詞と転換形容詞とが等位接続されるのは、(17b) では顕在化している、等位構造の左側要素の主要部名詞が削除された場合に限ると指摘している。これにより (17c) の非文法性が説明される。

- (17) a. weekly and morning newspapers, city and suburban houses  
 b. weekly newspapers and morning newspapers, city houses and suburban

houses

- c. \*a city and pleasant life (a.-c. Quirk et al 1985: 412)

なぜなら、(17c) は (18a) に示す通り、左側要素の主要部名詞が削除されることになるが、and が等位接続するのは (18b) のように NP であってそれより小さな要素ではないので、(18a) はあり得ない構造となるからである。

(18) a. \*a [city life] and [pleasant life]

b. [a city life] and [a pleasant life]

もし (17) に関する観察が正しいならば、(16a, b) はそれぞれ (19a, b) の構造を持つことになり、複合語の第1要素及び形容詞が等位接続されたのではないことになる。

(19) a. She likes both [cotton dresses] and [woollen dresses].

b. They detest both [suburban life] and [city life].

事実として、(16a, b) の解釈はそれぞれ「綿の衣服とウールの衣服」「郊外生活と都市生活」であり、「綿とウールの両方からできた衣服」「郊外と都市の両面を持つ生活」ではない。この解釈は (19a, b) の構造が正しいことを示唆する。従って、(16) のデータは第1要素 cotton 及び suburban が形容詞であることの証拠にはならないと言える。

以上のデータを見る限りでは、名詞を修飾するという機能以外には、名詞+名詞型の複合語における第1要素が形容詞であるという根拠は乏しいと言わざるを得ない。一方で、(13) のように名詞が程度の副詞によって修飾される場合は、形容詞への転換が起きている可能性が残る。問題は、

これが「名詞＋名詞」型複合語の第1要素についても当てはまるか否かである。上の(10b)で見た通り、the very leather couchについて、Carnie (2012)は? (marginally grammatical) との判断を示しているが、次の第3章では、母語話者がこのように第1要素が副詞によって修飾される例を実際に用いるケースが存在するのかについて検証することにする。

### 3. コーパスによる検証

Lieber (2016) は従来の研究において挙げられている例文等に対する、言語学者が自ら母語話者として下す文法性の判断が、言語学を専門としない一般の話者による容認度との間に乖離を生んでいると考え、大規模コーパスである COCA (Corpus of Contemporary American English) を利用しデータを収集・分析している。本稿においても、そうした問題意識の下、最新かつ最大規模のコーパスの1つである iWeb Corpus を用い、第1要素が程度の副詞によって修飾される例を収集し、分析を行う。

iWeb Corpus は2018年5月に公開されたばかりで、実に140億語の規模を誇る。これは5億6千万語を含む COCA の約25倍の規模である。他のコーパスと比べた場合の大きな特徴として、精選された約9万5千ものホームページをデータの供給源としている点が挙げられる。

まず、(1)－(3)に挙げた複合語の第1要素の内、程度の意味を用いると思われるものについて、屈折語尾 -er が付く例を iWeb Corpus により検索したが、該当すると思われる例は皆無であった。これは Carnie (2012) が(10c)について示した判断と一致する。一方、more, most は比較以外の意味も持つ為、データの判別は容易ではないが、次の例は more が比較級として用いられ、第1要素の city を修飾していると思われる例である。

(20) [H] e is used to a more city life...

(iWeb Corpus)



このデータの解釈が正しいとすれば、(20)の例は **Carnie** による (10d) の例の判断とは相容れないことになる。

次に、(13a)のように固有名詞が転換形容詞となっていると思われる例が名詞+名詞型複合語の第1要素に現れ、かつ副詞 **very** によって修飾されている例を検索すると、以下のようなデータが得られた。

- (21) a. The 30-second clip from Future 45, titled “A Very **Clinton** Christmas,” makes fun of her donations from banks...
- b. One night has to be a very **London** night...
- c. [T] here’s a fun Holiday video posted on Burberrys site has a very **London** vibe.
- d. I feel like this is a very **London** look.
- e. ‘Reforming’ is a very **London** state of mind.

(a-e. iWeb Corpus)

いずれの例も、**Quirk** らが (13) について述べるように、それぞれの名詞が意味するスタイルに言及していることが分かる。(21a)は「クリントンの」「クリントン流の」、(21b-e)は「ロンドンらしい」といった、程度の副詞による修飾を受け入れる意味を持つと思われる。このように固有名詞の持つ特徴・特質のうち、ある一点に着目しているという点で、形容詞が表す意味を有していると言える。

更に第1要素が固有名詞以外の名詞である場合について、次のような例が見られた。

- (22) a. It’s very **city** life, yet with beach vibes.
- b. [T] his is a very **brick** area, and a red brick area at that.<sup>6</sup>

c. [I] t's just witless trolling on a very **student** level...

d. It is a very **student** staple, the old corned beef, isn't it.

(a.-d. iWeb Corpus)

これらの例においても、それぞれの名詞の持つ特徴・特質のうち、いずれか一つについて、形容詞として表されていると言える。(22a)の city は「都会的な」、(22b)の brick は「赤煉瓦（でできた建築物）が多い」、(22c, d)の student は「学生（レベル）の」「(程度の)低い」といった意味を持つと推測される。

以上のデータは、いずれも名詞+名詞型複合語の第1要素が副詞 very または more によって修飾されていることから、第1要素が転換を経て名詞から形容詞に変化している可能性を示唆している。最後に、Huddleston and Pullum (2002) が挙げる (12a) のデータと相反する例が (23) である。

(23) a. In the past I've found that purely **cotton** ripstop is often quite heavy...

b. Was wondering if I should get the wool + cotton version for the winter, or purely **cotton** version for both seasons.

(a.,b. iWeb Corpus)

これも複合語 cotton ripstop / version の第1要素が形容詞 pure ではなく副詞 purely によって修飾を受けることから、第1要素が名詞からの転換形容詞であることを示している。

(20) - (23) の例は、いずれも複合語外部から複合語の左側要素が修飾を受けている。これは Anderson (1992) らによって提唱されたいわゆる語彙論の仮説 (Lexicalist Hypothesis) との関連で問題となる。これは形態的緊密性 (Lexical Integrity) とも呼ばれ、語の内部に統語部門の操作が及ぶことを禁じるものであり、以下のような例が排除される。

(24) \*very blackboard, \*blacker board

(島村 2014:15)

(24)において、veryはblackのみを修飾し、-erも複合語の左側要素にのみ挿入されている。(20)–(23)においては、very, more, purelyといった副詞が複合語内の第1要素のみを修飾しているので、この原則の反例であることは明らかである。<sup>7</sup>

#### 4. おわりに

本稿では「名詞+名詞」型の複合語の非主要部（左側）要素が名詞のままなのか、それとも転換形容詞となっているかを考察した。先行研究の検討からは、前者の説が有力と思われる一方、僅かながら後者の説を支持する根拠も残されていることから、iWeb Corpusによる検索を行ったところ、複合語の左側要素が副詞による修飾を許すことから形容詞となっている例がいくつか見いだされた。一方で、コーパスの規模を考えれば生産的と言えるほどの数ではなく、COCAによる検索ではほぼ皆無に等しいのも事実である。従って、「名詞+名詞」型の複合語の第1要素は殆どの場合、名詞と考えるのが妥当であると言える。今回得られた例はおそらく周辺的な例であると言えるが、語彙論の仮説の問題をはじめ理論的な問題を提起するのも事実であり、今回の予備的な研究に次いで、今後、母語話者の直感による判断も取り入れながら、引き続きこの問題を探求してゆきたい。

#### 注

\* 本研究は科研費（JP18K00661）の助成を受けている。

\*\* 文学部教授

1 「名詞+名詞」が複合語か句かの問題については Giegerich (2015)、第1要素と第2要素との間の意味関係については Jackendoff (2010)などを参照。本稿ではこれらの問題については触れない。

- 2 安井 (1982) は次のように述べている (括弧内は筆者) : 「伝統文法に親しんだ人なら (stone wall の) stone は名詞であるか形容詞かであるかという大論争があったことを御記憶であろう。」 (p. 25)
- 3 英国の代表的な学習用英英辞典である LDCE<sup>5</sup> と OALD<sup>9</sup> のいずれも, stone, leather について名詞としており, 形容詞との記載は見当たらない。
- 4 Carnie (2002) は? はかろうじて容認可能 (marginally grammatical) であるとして, その基準について, 次のように述べている : One could imagine a native speaker saying this sentence, but it seems less than perfect syntactically, and should probably be marked with a ? or ?? . (p. 39)
- 5 Quirk et al (1985 : 410) は, a very large station/\*a very bus station 及び a larger station/ \*a busser station のコントラストを挙げているが, これは統語的な理由に加え, bus に程度の意味が欠けていることが容認度に影響していると思われる。
- 6 (22b) の例において, [red brick] area も複合語を形成しているが, その内部の左側要素も「形容詞+名詞」の複合語となっている。このタイプの複合語の構造・性質については鳥村 (2014) が詳細に論じている。
- 7 鳥村 (2014) は以下の例を挙げ, 「形容詞+名詞」が複合語の第1要素に現れる際, 程度の副詞による修飾が可能であり, 形態的緊密性に反していると指摘している。
  - (i) very [early morning] twilights, a little [late night] TV, very [strong wind] supporters, very [high speed] films, very [low income] people, extremely [high quality] printer, very [low wage] workers, very [high power] supplies, very [long distance] Christmas delivery, very [low cost] energy

(p. 40 ; 括弧は筆者)

鳥村 (2014) は左側要素が拡張的に語の内部構造に現れたと見なし, very も複合語の左側要素の一部を成していると提案している。

### 参考文献

- Anderson, S. R. 1992. *A -Morphous Morphology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Carnie, A. 2012. *Syntax: A Generative Introduction*. 3rd ed. Oxford: Wiley-Blackwell.
- Curme, G. O. 1931. *Syntax. A Grammar of the English Language*, Vol. 3. Boston: D. C. Heath.
- Giegerich, H. 2015. *Lexical Structures: Compounding and the Modules of Grammar*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jackendoff, R. 2010. "The Ecology of English Noun-Noun Compounds." In Jackendoff, R., *Meaning and the Lexicon: The Parallel Architecture 1975-2010*, Oxford: Oxford University Press.

- Lieber, R. 2016. *English Nouns*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 島村礼子 (2014) 『語と句と名付け機能』東京：開拓社.
- Sweet, H. 1891. *A New English Grammar: Logical and Historical, Part 2: Syntax*. Oxford: Clarendon Press.
- 安井稔 (1982) 「最近の英文法」『言語』11(12), 24-27.

### 辞書類

- 『プログレッシブ英和中辞典』第5版. 東京：小学館.
- 『ジーニアス英和辞典』第5版. 東京：大修館書店.
- 『ウィズダム英和辞典』第4版. 東京：三省堂書店.
- LDCE: Longman Dictionary of Contemporary English*. 5th ed. Edinburgh: Pearson Education.
- OALD: Oxford Advanced Learner's Dictionary of English*. 9th ed. Oxford: Oxford University Press.

### コーパス

- COCA (Corpus of Contemporary American English). <https://corpus.byu.edu/coca/>
- iWeb Corpus. <https://corpus.byu.edu/iweb/>